２０１１年３月期 第３四半期　決算カンファレンスコール
（２０１１年１月２７日実施）

取締役　執行役員常務　経理経管本部長　青木昭一スピーチ

＜Ｐ．１：２０１１年３月期 ９ヵ月通算　決算概要（前年同期比）＞
１ページには、前年同期と比較した当期９ヵ月通算の連結業績を記載しております。

まず当期９ヵ月通算の平均為替レートは、資料の下段にありますとおり、米ドルは前年同期の９４円から７円円高の８７円、ユーロは前年同期の１３３円から２０円円高の１１３円となり、売上高、税引前四半期純利益に対し、それぞれ約５１０億円、約２２０億円のマイナスの影響がありました。しかし、各市場における需要の回復と、それぞれのセグメントでの収益性の向上を背景に、売上高、利益ともに前年同期に比べ大幅な増収増益を図ることができました。

表に記載のとおり、売上高は、前年同期比２４．４％増加、営業利益は約３倍となりました。税引前四半期純利益は前年同期比、約４倍となっておりますが、これは前期第３四半期に、ウィルコム社の株式評価損約２００億円が含まれているためであります。また、四半期純利益は、前年同期比、約５倍となりました。

＜Ｐ．２～３：２０１１年３月期 ９ヵ月通算　事業セグメント別　売上高、事業利益＞
次の２ページ及び３ページには、当期９ヵ月通算の事業セグメント別の売上高及び事業利益を記載しております。全てのセグメントにおいて、前年同期に比べ大幅な増収増益とすることができております。

＜Ｐ．４：２０１１年３月期 ９ヵ月通算　決算要約（前年同期比）＞
こちらに当期９ヵ月通算の決算要約を記載しております。

まず「部品事業」ですが、デジタルコンシューマ機器や産業機械、自動車向け部品の需要が、市場の回復に伴い大きく伸び、売上が増加しました。

また、デジタルコンシューマ機器向けの水晶／ＳＡＷデバイス用セラミックパッケージやＣＭＯＳ／ＣＣＤイメージセンサー用セラミックパッケージ、太陽電池については、旺盛な需要に対応すべく、国内外で積極的な生産能力の増強を進め、事業拡大を図りました。

この結果、部品事業の各セグメントで１５％を超える利益率を達成することができました。

「機器事業」では、「通信機器関連事業」において、タッチパネル式スマートフォンを北米市場向けに投入するなど、海外市場での製品ラインナップを拡充し拡販に努めた結果、売上が増加し、採算改善も進みました。

また「情報機器関連事業」においては、カラー機や中速機などの高付加価値なプリンターや複合機の販売が増加したことに加え、生産性の向上により、収益が拡大しました。

＜Ｐ．５：２０１１年３月期 第３四半期（３ヵ月）決算概要（第２四半期比）＞

続いて当期第３四半期３ヵ月間の業績について、当期第２四半期と比較してご説明申し上げます。

第２四半期と比較しますと、当期第３四半期は米ドルに対し３円の円高となったことを主因として、約３５億円の減収要因となりました。加えて、デジタルコンシューマ機器向けの部品需要の減少や、国内での携帯電話端末の販売の減少により、売上高は第２四半期を若干下回りました。

営業利益は、円高により約１０億円のマイナスの影響があったことに加え、売上の減少、減価償却費や研究開発費の増加により、第２四半期に比べ減少しました。しかし、税引前四半期純利益は、第２四半期に比べ受取配当金が約４０億円増加したため、４億円の増加となりました。

それでは各セグメントの第３四半期３ヵ月間の状況について、ご説明いたします。

＜Ｐ．６：事業セグメント別 四半期業績推移　ファインセラミック部品関連事業＞

各ページの左側に、前期第３四半期からの売上高、事業利益及び事業利益率の四半期ごとの推移をグラフで示しております。また、右側上段には前年同期との増減を、下段には当期第２四半期との増減要因を記載しております。

本日は時間の都合上、当期第２四半期と比較した増減要因につき、ご説明いたします。

まず「ファインセラミック部品関連事業」ですが、欧州での積層型ピエゾ素子やグロープラグなどの自動車用部品の販売が好調に推移した結果、増収となりました。

事業利益は、増収効果に加え、生産性向上により増加し、収益性も向上しました。

＜Ｐ．７：事業セグメント別 四半期業績推移 半導体部品関連事業＞

「半導体部品関連事業」では、円高の影響により、セグメント全体の売上高は第２四半期を若干下回りました。

しかし利益については、一層の生産性の向上やコスト低減を進めた結果、第２四半期を上回り、事業利益率も２２．４％まで向上させることができました。

＜Ｐ．８：事業セグメント別 四半期業績推移　ファインセラミック応用品関連事業＞

続いて「ファインセラミック応用品関連事業」です。

「ソーラーエネルギー事業」においては、日本及び米国を中心に需要は旺盛であり、これに対して増産及び拡販を進めた結果、セグメント全体で増収となりました。

一方利益については、「ソーラーエネルギー事業」において、国内外で製品価格が下落したことに加え、減価償却費の増加もあり、減益となりました。

＜Ｐ．９：事業セグメント別 四半期業績推移 電子デバイス関連事業＞

「電子デバイス関連事業」では、水晶関連製品やコンデンサなどの主要製品の需要は、デジタルコンシューマ機器の生産調整の影響を受け、減少しました。また、円高ドル安となったことから、特に米国子会社のＡＶＸ社の業績が押し下げられたことなどにより、減収となりました。

利益については、売上の減少により減益となったものの、利益率は１８％を超える水準を維持することができました。

＜Ｐ．１０：事業セグメント別 四半期業績推移 通信機器関連事業＞

続いて「機器事業」についてご説明します。

まず「通信機器関連事業」ですが、海外市場では携帯電話端末の既存モデルの拡販に加え、新モデルの貢献により販売を拡大させることができました。一方、国内では、新モデルの端境期であったことに加え、販売モデルの価格低下により売上が減少し、セグメント全体では減収となりました。

減収による影響に加え、次期モデルの開発費の増加もあり、事業損失は第２四半期とほぼ同等となりました。

＜Ｐ．１１：事業セグメント別 四半期業績推移 情報機器関連事業＞
次に「情報機器関連事業」についてご説明申し上げます。

欧州での需要は緩やかながらも回復基調で推移し、カラー複合機などの販売が増加したことにより増収となりましたが、利益については、売上拡大に向けた販売促進のためのコストの増加により、減少しました。

しかし、原価低減や生産性向上の取組みにより、収益性は１０％を維持することができました。

＜Ｐ．１２：事業セグメント別 四半期業績推移 その他の事業＞
最後に「その他の事業」です。

「その他の事業」では、子会社の京セラコミュニケーションシステムの季節要因による減収を主因に、セグメント全体の売上高は減少しましたが、コスト削減などの推進により、利益を伸ばすことができ、収益性は改善しました。

以上が当期第３四半期３ヵ月間の各事業セグメントの状況です。

続いて通期業績予想についてご説明いたします。

＜Ｐ．１３：２０１１年３月期 業績予想＞
当期９ヵ月通算においては、良好な事業環境のもと、当社グループの業績は順調に推移しました。第４四半期については、太陽電池の需要は引き続き堅調に推移すると予想されるものの、デジタルコンシューマ機器向けの部品需要の本格的な回復には、時間を要するものと考えています。

このような状況を勘案し、通期連結業績予想については、昨年１０月に公表した数値から変更しておりません。

なお、事業セグメント別の予想については、１４ページ、１５ページに記載のとおり、当期９ヵ月間の実績と第４四半期の見通しを踏まえ、変更しています。

「部品事業」では、足下のデジタルコンシューマ機器向けの部品需要は調整が継続しているものの、小幅な調整に留まる見通しであり、９ヵ月間の実績を考慮し、今回、売上高、事業利益予想を上方修正しました。

一方「機器事業」では、「通信機器関連事業」において、国内外での競争激化による端末価格の下落と開発費の増加により、今回、売上高、事業利益予想を減額しました。

第４四半期も、積極的な受注の獲得及び生産性向上への取組みを通じ、各セグメントにおいて、この業績予想の達成を目指してまいります。

以上